1999年度研究助成論文等要旨

ジョージ・エリオットの芸術と＜読み＞

——*Daniel Deronda* を中心に——

平　井　雅　子

Daniel Deronda ほど問題をはらむ小説で「芸術とは何か」を論じるのは大変な挑戦である。私はシンポジウムの方向として、「芸術」と「読み」と「社会に対する意味」という三者は切り離せないとの考えを提示した。二人の主人公を中心とするプロット間の統一などの「芸術性」評価の問題は重要だが、それを形だけで考えても意味がない。今日、我々が新たに捉えなおさねばならないその社会性、倫理性という観点から見なければ、エリオットの芸術の意味を考えることはできない。

寺西氏によれば、この小説のナレーターは一方で視点変化を明示し、「真実」の存在を信じ、ヴィクトリアニズムの名残をとどめているが、他方、Englishness と Jewishness の間に揺れるデロンダの葛藤を反映して揺れるナレーターの「優柔不断さ」や、グェンドレンとその無意識を通して聞こえる「社会の見えざる声」、ナレーターの文体中での融合は、バフチン的なポリフォニーの様相とモダニズムの萌芽を宿している。私見ではバフチンの理論も脱構造主義もフェミニズムも、形の上の対話や脱構造にとどまらず、その背後にある＜政治性＞が重要であり、それがエリオットの文章でどう表れるのかの解明に資するとき、その理論を用いる意味が明らかになるだろう。

村瀬氏は、この小説に潜在化したフェミニズム的視点を探る。デロンダが母レオノーラやグェンドレンの告白をいかに「読み解く」かという分析を通して見えるのは、彼が微妙な意識の揺れを経ながら彼女たちとの精神的距離を置

き、ユダヤ人男性としての生き方を選択していく姿である。デロンダはレオノーラの告白から母の苦しみではなく、祖父が伝えようとしたユダヤ主義のメッセージを読みとる。グェンドレンの苦境や告白に対しても、デロンダはその理性の裏に、女性の中に潜む悪から目をそらそうとする現実認識の甘さと家父長的イデオロギーをうかがわせる。エリオットが婉曲に示そうとしたフェミニズム的視点とは、女性達の反抗と服従という「現実」であり、裏をかえせば、権力に対する無意識の誘惑と反抗、確執という女性の「悪」なのだ。

その女性の「悪」のイメージは、恐怖と不気味さともに、社会に対する積極的意味の可能性も示唆するのではないか。それが次に私の提示した疑問である。松田氏は、小説冒頭の「死人の顔の絵」をめぐる視覚的図式に注目し、女性主人公とその背後の英国社会の道徳的覚醒に向けたエリオットの目的意識を読み取る。絵に託された「他者を押しのける者」「押しのけられた者」という競争社会の否定的図式が、悪を契機とするグェンドレンの道徳的成長によって切り崩される。デロンダやマイラの超世俗倫理に対して、彼らには不可能な自己認識を手にするグェンドレンに、エリオットが社会に託す希望が読み取れる。

シンポジウムの総括として、エリオットの芸術の核心は「悪」にあると私は述べたが、それはまた問題提起でもある。悪の実態の究明。非人間的現代的エゴの恐怖を描いたグェンドレン夫婦の確執。「死人の顔」を甦らせるという悲願となって表れるイデオロギーそのものの不気味さ、その抗いがたい恐怖。それは単なる被害者の権力への抵抗にとどまらない「悪」の根源に迫るものだ。

附記：本稿は、1999年度神戸女学院大学女性学インスティチュート研究助成により、2000年11月25日、日本ジョージ・エリオット協会第四回全国大会シンポジウムにて行った司会発表の要旨である。

1999年度研究助成論文等要旨

書く女／書けない女——杉本正生の「小説」

飯　田　祐　子

〈新しい女〉の登場と関連してあまりにも有名な『青鞜』という雑誌は、はじめから〈新しい女〉のための雑誌であったわけではない。『青鞜』に集まった女性たちには、それぞれの文脈やそれぞれの立場があり、それらによって、かなり雑多で複雑な欲望が渦巻いていただろうと思われる。

そのなかで、書くという欲望そのものについて考えるために、杉本正生という女性のテクストをとりあげた。杉本正生は、青鞜の会員第一号となった女性であり、十五の作品を『青鞜』に掲載している。興味深いのは、『青鞜』に参加する以前にすでに執筆活動を始めていたということである。参加直前には、『京都日出新聞』に連載小説が掲載されてもいる。そうした女性が、あらためて『青鞜』に参加して、何を為そうと考えたのか。彼女の掲載作品の前半は『青鞜』の中では珍しく、「習作」と名付けられた連作となっている。後半の掲載作品は、「小説」と付されているが、しかしこれも、彼女自身のスキャンダルについて語るというもので、「小説」としては極端に告白の要素の強いものとなっており、長編小説として予定されていたにもかかわらず、結局未完に終わっている。これらの作品の書かれ方は、端的にいって不安定さを示していると思われるが、それを、積極的に「小説」という形式をめぐる実験としてとらえたい。杉本正生のテクストは、書く主体の問題を考える上でも、読み読まれる中でテクストが生まれるという過程の問題を考える上でも、複雑な要素を兼ね備えている。前者の問題系では、非常に戦略的だと思われる部分と無意識が突出

していると思われる部分を認めることが可能であり、後者の問題系では、読んだテクストのパロディ化の要素と、これから読まれる読者を意識した自己言及性、あるいはメタ化する要素をともに認めることができる。こうした意味で、テクストとしての一貫性には欠けるが、実験性には富んでいるといえる。女性のテクストの多くは、完成度が低く無名のまま忘却されているが、書くという行為の複雑さを示すテクストとして読むことができることを示した。

附記：本稿は、1999年度神戸女学院大学女性学インスティチュート研究助成による研究成果として、『『青鞜』という場・近代という時間』（仮題）（森話社、2001年7月刊行予定）に執筆した論文の要旨である。

1999年度研究助成論文等要旨

19世紀の西洋人が見た琉球の女性

真栄平　房昭

18世紀末から19世紀にかけて地球的規模で展開された「探検航海」の結果、ヨーロッパ人の世界認識は大きく拡大することになった。たとえば、「キャプテン・クック」の名で知られるイギリスの探検家ジェームズ・クックの1768年から79年までの三度にわたる航海によって、未知の領域とされていた太平洋の様子なども次第に明らかとなったのである。

さらにイギリスがアジア・アフリカに進出した動機として、産業革命後の資本主義市場の拡大という経済的要因があったことはいうまでもない。当時、イギリスは「七つの海を支配」する海洋国家として世界史上に頭角をあらわし、ナポレオン戦争の時代（1797－1815）には大小約千隻を超える海軍力と、13、14万人の兵員をかかえる軍事大国となった。1796年には北太平洋探検に向かう途中のイギリス海軍のプロヴィデンス号が、シンガポールやマカオなどを経由して琉球に寄港した。

探検航海にまつわる世界史の波は、こうして東アジアの琉球諸島の岸辺にも打ち寄せ、19世紀になると欧米各国の船が相次いで来航した。彼らの手になる航海記や滞在見聞記録は、西洋人の眼にアジアの社会や文化がどのように映ったかを知る上で貴重な資料を多く含んでいる。それらの記録を女性史や社会史の視点から読み解く試みとして、小論では西洋人の眼に映った琉球社会の女性たちのイメージに注目しながら、町の風景や民衆、市場で働く女性たちの様子など、庶民生活の一端をできるだけ具体的に把握し、西洋人が抱いた「異文化

へのまなざし」に関する検証を試みた。

附記：本稿は、1999年度神戸女学院大学女性学インスティチュート研究助成による研究成果として、『なは・女のあしあと—那覇女性史（前近代編）』（琉球新報社、2001年）に執筆した論文の要旨である。

イギリス人が描いた琉球女性（1827年）

出典　Beechey, Frederic W., *Narrative of a Voyage to the Pacific and Bering's Straits.* London, 1831.
（ビーチー『太平洋およびベーリング海峡航海記』）